

使徒言行録 12章 1節～25節

『主が導かれる』

朗読された使徒言行録 12章には大きく三つのことが記されています。一つは、ヘロデ王によるヤコブの殺害とペトロの投獄。二つは、牢獄に入れられたペトロの奇跡的な救出。三つめはヘロデ王の死、ということです。

エルサレム教会はユダヤ教からの迫害を受けていました。その迫害はもっぱらギリシヤ語を話すユダヤ人に対する弾圧で、彼ら彼女たちはエルサレムから出ざるを得ず、散らされていった、という話を先週聞きました。まだその段階では、同じエルサレム教会の中でも、ヘブライ語を話すユダヤ人、生粋のユダヤ人たちは、弾圧を受けていなかった。ところが今日の聖書箇所を読むと、時の王ヘロデがヤコブをいきなり殺害したというのです。

ここに出てくるヤコブとは、キリストの 12弟子の一人で、使徒とされたヤコブ、雷の子と呼ばれたヤコブのことです。12使徒のうちの一人が殺される、ということは、ギリシヤ語を話すとか、ヘブライ語を話す、ということに関わりなく、キリスト教会本体に迫害の刃が迫ってきた、ということです。しかもそれはユダヤ教の側からというのではなく、政治家による迫害であり、いきなり本丸を攻めてくるような、攻撃だった。ヤコブがどのように逮捕されて、どのようにして殺されたのか、詳しいことは一切かかれておらず、ただ剣で殺した、とあります。ヤコブの殺害で、ユダヤ人たちが喜ぶのを見て取った王は、さらに人々の支持を得ようとペトロを逮捕。当然処刑、という腹積もりでした。

教会が大変驚いたのは言うまでもありません。愕然としたのではないか。パニックにもなったと思います。そこで彼ら彼女たちは何をしたか。祈祷会を開いた、ということです。

処刑の寸前、ペトロは主の天使によって導かれ、牢獄を脱出。ペトロは夢うつつのような状態で、導かれて獄を出たことが報告されています。

ペトロはある通りまで行き、天使が離れ去った時、我に返って、「今、はじめて、本当のことが分かった。主が天使を遣わして、ヘロデの手から、またユダヤ民衆のあらゆる目論見から、わたしを救いだしてくださったのだ。」と語るのです。

脱出後、ペトロは祈祷会をしている教会を訪ねます。教会といってもそれは家の教会です。マルコと呼ばれたヨハネの母マリアの家で、個人の家キリスト者が集まり、ペトロのために祈っていた。そこに脱出したペトロが門の戸を叩くのです。だが応対に出た女中はもとより、集まっていた人々も、ペトロが

戻ってくるはずがない、と思い込み、「あなたは気が変になったのだ」と言う者もいたり、「それはペトロではなく、何か天使ではないのか」と言ってみたり、ペトロが外にいるのに、戸をあけようともせず、頓珍漢な、対応をするのです。

しかしペトロが戸を叩き続け、彼らが開けてみると、ペトロがそこに立っていました。家にいたものは皆、とても驚くのです。ペトロは驚く人々を制して、自分が主の天使に導かれて獄を脱出したいきさつを語るのです。ペトロは自分が救出されたことを、ヤコブとその兄弟に伝えなさい、と言ひ、新たな歩みへと向かうのです。

ここに名前があげられているヤコブは、殺されたヤコブではなく、主イエスの実の兄弟であったヤコブのことであり、おそらくはこのときエルサレム教会の中心人物になっていた。だから彼に伝えなさい、と言われているのです。

ペトロの脱獄によって、王たちの側は騒然としました。王は見張りにあっていた番兵を連行させるのです。

その後、ヘロデ王の演説に対して、集まった人々が「神の声だ。人間の声ではない。」と叫びをあげた。ヘロデ王を神格化する人々がいたのでしょうか。「するとたちまち、主の天使がヘロデを撃ち倒した。」のです。ヘロデは蛆に食い荒らされて、とありますが、これは「虫に食われたような状態になって」という意味で、ヘロデは息を引き取ったのです。

使徒言行録12章は、三つの出来事が記されていると、最初に申しあげました。この三つの出来事は、何を語りかけているのでしょうか。

まず一つには、このときエルサレム教会は、大きな政治的な力の前で翻弄させられていたということです。教会と信仰者が大きな力によって翻弄させられ、弾圧されている。教会の指導者であるヤコブが殺害され、ペトロが逮捕される。

それはもちろん二人に対する個人攻撃なのではない。教会そのものに対する攻撃、弾圧ということです。

そのとき、エルサレム教会の人々はどうしたのか。右往左往したのか、逃げ出す準備をしたのか。そうではなかった。祈りの会をもったのです。「熱心な祈りが神にささげられていた」という言葉は「神にたいする祈りがずっと続けられていた」、というのが元の言葉です。ずっと祈り続けられた。

おそらく信仰を知らないものからすれば、こんな危機的な状況の時に、逃げもせず、逆に抵抗するわけでもなく、ただ祈り続けている、というのは、無力の象徴のようなものかもしれません。お祈りして何とかなるのか、という声が聞こえてくる。しかし教会は祈る。キリスト者は祈る。それは祈るしかないじ

やないか、というような意味ではない。この危機においても、わたしたちを導いてくださる神の信実を信じる者とさせてください、ということであり、神の信実の中にあることを受け取らせてください、ということであり、それを受け取って、この危機の中で今日を生きる者とさせてください、という祈りです。

わたしたちも根本同じです。危機に直面することもあれば、どうしたらいいのかわからないというような場面に遭遇することもあります。そこでも祈る、というのがわたしたちの根本の生き方です。祈るということを非常に倫理的にとらえる人がいます。修行のようにとらえる人もいます。毎日朝晩祈る、というと、立派だな、とかすごいね、というふうにとらえる。祈ることがよいクリスチャンの証拠のような捉え方。そういうことではないのです。まったくそういうことではない。祈ることは、その人にとって基本的な人間としての在り方なのです。普段はもちろん、危機の時も、わたしはだれと向き合って、わたしであるか、ということです。神に祈り、神と向き合い、神の言葉に聞いて、わたしはわたしであり、わたしになっていく。だから、危機の時、わたしを見失いそうなとき、見失っているとき、エルサレム教会の人々は集まって祈り続けた。

ペトロが牢獄から脱出して、マルコの家に来た時、祈り続けていた人たちが、取次に出た女性のことを気が変になってのだ、と言ったのは、神が働いてくださる、ということを受けとめていなかったかのような対応です。ペトロはもう戻りっこない、と決めつけていたのでしょうか。人は人知（人の知恵）の中で決めつけたり、思い込んだり、こうなるのではないか、と高をくくるのです。だが祈ることは、人知を超えた神の働きの中にある自分を受け取ることでもあります。

そもそもヤコブは殺害されて、ペトロは助かる、これはどういうことなのか。それはわたしたちにはわからないことです。わからないことも、わかっていると思い込んでいることも、神の信実の中にあることを、知らされていく、祈りはそこへわたしたちを招くものです。

ペトロが主の天使の導きによって牢獄を脱出したことは、ペトロの力ではなく、主の導きでした。神が働いてくださっている。ペトロが自分に対して語った言葉、「今、初めて本当のことが分かった。主が天使を遣わして、ヘロデの手から、またユダヤ民衆のあらゆる目論見から、わたしを救い出してくださいましたのだ。」本当のことが分かった、という本当のことっていったい何でしょうか。それは、神の信実のことです。神さまの信実が働いて、わたしは救い出された

のだ、神のまことが働いている、そのことが分かった、というのです。今日の聖書からわたしたちが受け取るべきはこのことです。神は信実をもって働いてくださっている。もちろんわたしたちにはわからないことが少なくないし、多い。だが大事なことは、すべてをわかろうとすることでもないし、すべてを理解することでもない。ただ、今このときも、神が働いてくださっているし、わたしはその働きの中にいる、ということを感じて受け取ることなのです。

ペトロは、マルコの母マリアの家で、皆に自分の救出について語りました。そしてペトロはそこを出て、他のところへ行った、というのですが、それは、脱獄したのですから、当然、別の場所に行く、ということであるのですが、ペトロ自身、神が働いてくださっていることをあらためて受け取り、だからこそ、新たな、伝道の歩みに踏み出していった、ということなのだろうと思います。

神の働きの中にある自分を知る、そこで、自分の使命を確認して、歩みを始めていく、それがわたしたちの信仰生活です。

最後にヘロデの死が報告されています。この死について、一つのことだけを言っておきたいと思います。それはヘロデという王が、ヤコブを殺害し、それに気をよくして、ペトロも処刑するつもり逮捕した。だが、ペトロは主の天使に導かれ脱出した。ペトロがいなくなった報告も彼は受けた。だが彼はそこに神が働いている、ということは何ら感じないし、受け取ろうともしなかったのではないか。何も考えない。もし彼がペトロの脱出に、神が働いておられる、ということを感じていたら、自分の演説に対して、神の声だ、という人々からの叫びが上がった時に、ただそれを黙って受ける、ということはないか。ヘロデはここで、神の働きを受けとめて生きるのをやめて、自分が何者かになろうとしている。23 節の言葉は、神の栄光を帰さない人間、神になろうとする人間に対する神の意思が現れているのだと思います。

教会も、そこに集められたものも、危機の中にありました。しかし、神の働きの中にあることを受けとめる者がいるところでは、神の言葉はますます栄え、広がっていくのです。